The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『オデュッセイア』の読まれ方（1）
Author(s)	内田，次信
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2012, 52, p. 151-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『オデュッセイア』の読まれ方（1）

内　田　次　信

木馬作戦の主導など、トロイア戦争で目ざましい活躍をしたオデュッセウスを主人公とする叙事詩がホメロス作『オデュッセイア』、すなわち『オデュッセウスの歌』である[1)]。「ホメロス」が作ったと伝える叙事詩には他に『イリアス』もあるが、本論では、ヤコビ[2)]らにならって、この「ホメロス」という名は『イリアス』を完成させた詩人に適用し、『オデュッセイア』を仕上げた者のほうは、『オデュッセイア』（の）詩人と呼ぶことにする。しかし、紛らわしくない場合は、いずれも「ホメロス」と称する。いずれの叙事詩も、それぞれ一人の偉大な詩人によって大成され、芸術としてまとめ上げられているという理解の仕方を踏まえる。古代の通説通りに、今日でも少数の学者が両叙事詩を一人の詩人に帰するが[3)]、説得的とは言えない。

『オデュッセイア』は、それが成立したと目される前七世紀以来―『イリアス』の場合は少し早く前八世紀ころか―、偉大な古典として、古代ギリシア・ローマ時代を通じて、『イリアス』とともに尊ばれてきた。ただし、伝存する写本やパピルスを見ると、数量的に、『イリアス』のものが『オデュッセイア』のものより倍くらい多い[4)]。これが、両篇についての古代の評価の違いを―それがどういう性質のものであったにせよ―反映することは確かであろう。しかし、いずれにせよ、両篇がギリシア時代において最も尊敬され愛好された古典文学であることは言うまでもない。それはまず、公的な場で多くの聴衆の前で吟唱された。吟唱の例として、例えばプラトンの『イオン』で言及される、エピダウロス・アスクレピオスの祭礼やアテナイ・パナテナイア祭での吟唱詩人の競技がある（五三〇ab）。そういう競技の制度は、前七世紀にまでさかのぼるかもしれない[5)]。また私的には、教育用のテキストとして用いられたり、教養の糧として読まれたりした。

両古典は、その作品世界を範とする新たな文学創造を刺激し、美術にも表現素材を提供する一方、その知的内容に関する論争を通じて多くの思想的発展を促す土壌ともなった。

ホメロスの作品に関する知識は、地域的には、ラテン語を用いる西方地中海世界はともかく、ギリシア語圏の東方世界では広く普及し、ローマ帝国の領域を超えて遠くインドにまで

伝わっていたとも言われる[6)]。

ギリシア語とその古典作品全般に関する知識が西方ヨーロッパでは一時失われた中世時代には、ビザンツ世界は別として、ホメロスの作品もほぼ忘れられた。例えば、ラテン語の優秀な写字生が、写本でギリシア語に行きあたると、「この部分ギリシア語につき読めず」という断り書きをした、などといわれる[7)]。したがって、ギリシア語の作品を読むということはましてありえなかったわけである。トロイア戦伝説の知識は失われなかったが、ホメロス等のギリシア古典ではなく、ディクテュスやダレースの、内容的にかなり特異なラテン語の書に人々は依拠した。ルネッサンス以降、ギリシア古典がふたたび読まれるようになると、そういう関心を集める中心となり、現代にいたるまで、ジョイスの『ユリシーズ』のような文学作品にインスピレーションを与え、映画などの芸術表現の基になっていることは周知のとおりである。なお、「ユリシーズ」という英語名は、「オデュッセウス」の別名「オリュッセウス」のラテン語形に由来する。オデュッセウスに関わる伝説が、今日のヨーロッパに、ラテン語文明圏を経て伝えられてきた名残である。

ラプソードイによるテキストの「ワイルド」化

このような古典作品『オデュッセイア』には、非常に長い、また多様な受容の歴史がある。テキストの伝承一つをとってみても、さまざまな運命の変転や干渉を経験した。口承詩人ホメロスあるいは『オデュッセイア』詩人が、最初にそれぞれの叙事詩を完成させた後、具体的にいつかはともかく、それらが誰かによって、何らかの機会に書き留められた。諸説として、自分では文字を知らない（？）ホメロスが口述して書き留めさせたとか、詩人の讃嘆者が書き物にしたとかと言われる一方[8)]、アダム・パリーは、詩人（『イリアス』の詩人）自身が文字を利用したと推測する[9)]。いずれにせよ、そういう形で、口演の他に書き物ないし写本の形でもホメロスの詩は各地に普及することになる。前五世紀まで、あるいはそれ以降も、口承が主だったが、それでも何世紀にもわたって口承と書き物との両媒体が「測りがたい相互作用」を行なったとも考えられている[10)]。

口承が主という事情のゆえに、ホメロスのテキストは長い間かなり流動的な様相を見せていた。しかし、パピルス研究者によると、前二世紀が「分水嶺」で、それ以降はおおよそ固定された状態になることが確かめられる。今日われわれに読まれている「流布版（ヴルガータ）」[11)] から見て、古いパピルスのテキストは、「エクセントリック」あるいは「ワイルド」と思えるテキスト異同を示すことがあるが、それらはその「分水嶺」以前の状況においては、けっして異常なことではなかったらしい[12)]。

極端な異読テキストの例を挙げると、『イリアス』の第一巻冒頭で、われわれが知る序文（プロオイミオン）とは全く異なる以下の詩句が、『古イリアスarkhaia Ilias』のものとして

伝えられていたということが、ある写本（Z）によって知られる。

わたしはムーサイと、弓で名高いアポローンとを歌う。

この詩行には、ニカノル（キュレネ人？、アレクサンドリア人？）とクラテス（ペルガモン派の学者）とが言及していたという。この序が『イリアス』本文とどうつながるかはよく分からない。

また、もう一つ異読の序が「いくつかの写本で」記されていたことを、アリストクセノス（前四世紀、アリストテレスの弟子）が伝えていたという（同Z写本）。

Espete nyn moi Mousa olympia dōmat' ekhousai
Hoppōs dē mēnis te kholos th' hele Pēleiōna
Lētous t' aglaon hyion.ho gar basilēi kholōtheis.

最後の半行（ho gar basilēi kholōtheis）は、現『イリアス』の九行目と同じであり、これらの三行が現行九行と置き換えられる形になる。アキレウスの怒りの他に、『イリアス』本文でじっさいにそれが大きな役割を果たすアポロンの憤怒も明瞭に表現する点が興味深い。ただしアポロンの憤怒は、『イリアス』出だしの状況が動き出すきっかけを与えるだけで、アキレウスの怒りのように作品全体とかかわる射程を持つわけではない。ある学者は、『キュプリア』とつなげるための（ラプソードス）の句だと考えている[13)]。

こういうテキスト異同は、用いられる詩句の違いを小規模な形で示す場合ももちろん多い。しかし、より顕著な現象として、「余剰詩行」を提示していることがある。パピルス断片による他、古くから、古注の記述を通じて、あるいは他の古典作家の引用によって、流布版にない詩句が諸版テキストに含まれていた諸例が知られている（流布版にはあるがパピルス等の一部に欠けている「不足詩行」もあるが、より数は少ない）[14)]。

そういう異同や詩行の挿入は、もっぱら吟唱詩人（ラプソードス）たちによる口演の繰り返しの中で生じてきたものと見られる[15)]。吟唱詩人は、独自の創作よりも、むしろ多くは、ホメロスのテキストを暗誦し、その記憶に基づいて口演を行なう職業人であった。この点で、より古い時代のアオイドス、すなわち、伝統的口承的な詩句技術を利用しつつ、自己自身で創作する能力を、神助とともに誇る「アウトディダクトス（自己習得）」のペミオス[16)]のような創造的歌人と基本的に異なっている[17)]。ある学者の意見では、「ラプソードスの語は、創造的歌人アオイドスと対比させるために造られたもの」であるという[18)]。ただし、ラプソードスもときには創作を行なうようになったと思われるが、それは『讃歌』のような小規

模のものであったろう[19]。ホメーリダイ、すなわち「ホメロスの詩を専門とするラプソードスたち」[20] の一人として伝えられるキュナイトスは、古代の学者によって、『ホメロス風アポロン讃歌』の作者とも伝えられる[21]。また、『イリアス』第一〇巻「ドロンの巻」も、ラプソードスによる作品が『イリアス』本体に取り込まれたものかと論じられる[22]。しかし、それは例外的あるいは小規模の創作である。クセノポン『饗宴』3・6では、「ラプソードスたちほど愚かな者はいない」と言われ、この語に「馬鹿の一つ覚え」というニュアンスがあったことを示す[23]。

他方、彼らラプソードイは、「前四世紀の悲劇俳優と同様、（ホメロスの）テキストを神聖不可侵なものとしてではなく、むしろ、ことわりなく飾ったり、拡張したり、短縮したりすることが許される遺産と見なしていた」[24]。彼らは、各地で吟唱口演を行なう過程で、あるいは自分の記憶にある詩を書き下ろす作業の中で、詩句レベルの改変や詩行の挿入を、ホメロスのテキストに対してかなり自由に行なったのである。ただ、後述のように、それらの異同が総じて「流布版」には取り込まれなかったのは、多分に個人的で特殊な種類のものであったからだろう。

最初のホメロス解釈者テアゲネスによる「縮小化」傾向

今は、『オデュッセイア』ないしホメロスの詩の読まれ方ということを話題にしようとしているのだが、この観点から言うと、この吟唱詩人たちの中から、ホメロスの詩を自分なりに釈義し、しかもそれを散文で人に提示しようとした最初の解釈者たちが生まれたと指摘されている[25]。詩解釈者としてのラプソードスの伝統は、後代においても確かめられる（プラトン『イオン』五三〇c）。

そのようなラプソードス的解釈者の最初の世代の一人、テアゲネスという、前六世紀のレギオン（現レッジョ・カラブリア）出身の吟唱詩人は、アリストテレスらペリパトス派において頂点に達する「詩批評と文法学（クリティケー、グランマティケー）」の創始者とも見なされた[26]。「ホメロスについて最初に書をあらわした」と伝えられる[27] テアゲネスは、その中で、ホメロスの擁護を試みたようである。というのは、『イリアス』二〇から二一巻にかけて、ギリシア側に味方する神々とトロイア方を援ける神々との間で行なわれる戦い（テオマキアー）の箇所に対し、古くから、それは為にならない（アシュンポロン）、また不適切な（アプレペス）話だという批判がされていた。これは、ホメロスやヘシオドスにおける神々の描写を不適当、不敬と批判するクセノパネスらの立場からの批評だったらしい。それに対して、ホメロス吟唱を職とするテアゲネスが、このように詩人弁護を試みたのである。「このような（ホメロスへの）非難を、ある人々は、詩句（の読み方）から論駁し、それら全ては、諸元素の性質に関してアレゴリー（寓意）的に言われているのだと見なす。たとえ

ば神々の敵対（の叙述）においてである。乾いたものは湿ったものと、熱いものは冷たいものと、また軽いものは重いものと戦い合うと人々は言うのである。さらに水は火を消すものである、云々。・・・同様に詩人が、心的状態のあれこれに神々の名前を与えている場合もあるとする。思慮にはアテナ（の名）を、無分別にはアプロディテを・・・と。この弁護の仕方はとても古く、ホメロスについて最初に著作をあらわしたレギオン人テアゲネスに始まる」[28)]。「神々の敵対」の叙述を、例えば「乾いたもの」対「湿ったもの」との争いの表現であるとするのは、自然学的な観点からのアレゴリー釈義法であり、もう一種類の「アテナ＝思慮」などとするのは、心理学的なアレゴリー解釈法である。ホメロスのテキストで、じっさいに神の名が、神的存在そのものではなく、何か別の要素や概念を表わしている箇所は、たしかに認められる。明らかな例として、軍神「アレス」の名称は、しばしば「戦闘」の意味で使われ、より限定して「戦傷」を表示する場合さえある[29)]。しかし、これらの例での「アレス」は、「アレス＝戦闘を、（敵軍と）戦い合わせる」というように、神格的には全く実体を持たないことが明白である。それに対し、『イリアス』で描かれる「神々の戦い」では、それを不道徳などと見るかどうかは別として、ふだんから人間のように振舞う彼らが、戦場で喧嘩し合うという、珍奇な光景が、ある程度の細部を伴って描かれる。プリミティブな宗教言説で、「嵐」対「晴朗」とか、「冬（または寒）」対「春（または暖）」とかいった自然的諸物や現象を対立させる慣習に、ホメロスの詩が、基本的発想を負うているということは十分に考えられる。この系統の神話表現は、比較的後代まで用いられる。例えば、ペルガモンのゼウス祭壇では、アイテルと日（ヘーメラー）との戦いが描かれている。しかしここではホメロスは、それを超えて文学的叙述を発展させ、新しく楽しい場面を聴衆に提供していると見られる。また、『イリアス』のより大きなストーリーの展開に、それはある種の機能を果たしているとも解される。

他方、『オデュッセイア』においては、ポセイドンがほかの神々から浮き上がっているという点に若干その痕跡は認められるものの、総じて言って「神々の戦い」の主題は取り上げられない。これは、神々の世界では、『イリアス』におけるよりも、全体に意思統一が行き渡っているらしいということと関連させうる。つまり、『イリアス』と異なるそういう「神学」的な特徴によると見なしうる[30)]。したがって、『オデュッセイア』においては、「神々の戦い」という点に関するアレゴリー解釈には出番がない。しかし、例えば、ヘルメスがキルケの魔法封じにオデュッセウスに与えた薬草モーリュを「理性」のことだと説く読み方が、後世に連綿として受け継がれたように、『オデュッセイア』は、そういう道徳的アレゴリー論を招きやすい作品である。この叙事詩は「人生の鏡」だ、というアルキダマスの論が、一つの典型的読み方に挙げられる[31)]。

テアゲネスが、自分の立場上、ホメロスを弁護しようとした気持ちはよく理解できるもの

の、彼が最初に論著の形で発表し、その後追随者を輩出することになるアレゴリー的解釈法は、ホメロスが試みた詩的発展を引き戻し、描写の生気を色褪せさせ、内容的厚みを縮小させる方向に行こうとしている[32)]。例えば、自然学的アレゴリー解釈の系統では、その他に、それをより徹底させようとしたメトロドロス（ランプサコス人、アナクサゴラスの弟子、なおエピクロス派の同名ランプサコス人とは別）による、「アガメムノンすなわちアイテル、アキレウスすなわち太陽、ヘクトルすなわち月、うんぬん」という例が挙げられる[33)]。ヘラクレイトス『ホメロスの寓意』は—著者のホメロスへの情熱は独特であるが—、自然学的な種類以外の解釈法も含めた、そういう伝統のひとつの集大成である。

しかし、一般にこういう縮小化傾向は、その後で現れて来る、アレゴリー解釈法以外のホメロス論や研究においても、しばしば見られることになるのである。

アレクサンドリア時代の学者たち

次に、ホメロスのテキスト批評が初めて学問的に行なわれるようになった前四世紀以降、とくに前三から二世紀のアレクサンドリア時代の状況を見ることにしよう。ラプソードスたちによって、テキスト改変がかなり無造作に自由に加えられたことは、上記で触れたが、そういう中で、西はマルセイユ、東はキュプロス、またギリシア本土ではアルゴリス等々の「諸都市版」も生じることになる[34)]。地中海地域の諸方面に散らばるギリシア人たちの間で吟唱され、受容され、普及するとともに、そういう各種の版が発生していったと見られる[35)]。なお、諸都市版のテキストが、他と比べて必ずしも劣等だったわけではない。例えば、『イリアス』3巻51行に関して、「最も良い版（khariestatai）」の中にアルゴリス版が数えられた[36)]。

ホメロスのテキストは、多かれ少なかれ乱れた状況におちいった。アレクサンドリアの学者ゼノドトスが、諸写本の読みに関して直面した事態は「カオス」だったと称する学者もいる[37)]。一つにはそういう状況を見かねてであろう、学問的な校訂の試みが、前四世紀ころから現れる。アリストテレスが、アレクサンドロス大王のために「小箱（または円筒）入り」の『イリアス』校訂本を作ったという[38)]。しかしこれは、単なる伝説かもしれないとも疑われる[39)]。より確実なのは、アンティマコス（前五ないし四世紀）という、コロポン（イオニア地方）出身の詩人兼学者のテキスト研究である。その「アンティマコス版」の後、上記ゼノドトス、アリストパネスらが、前三世紀以降、アレクサンドリアで諸「個人版」を刊行する。そして、アレクサンドリアの文献学を代表するアリスタルコスによって、それらが、諸都市版とともに、批判的に利用されることになる[40)]。ただ、資料が乏しいので、総じてそれらがどこまで本式の校訂本であったか明瞭ではない。じつはアリスタルコスの校訂本も、後記のように、その点はよく分からないのである[41)]。

さて、アレクサンドリアの大図書館[42]に諸写本が集められる中で、これらの学者たちが研究に着手したとき、かなり特殊な、「エクセントリック」な異同を見せる諸本のほかに、すでに標準版あるいは流布版（ヴルガータ）、つまり実質的に今日われわれが読むテキストと言えるものがあったかという点について、専門家の間では対極的に考えが分かれている。

（A）　一方の意見では、アリスタルコスらアレクサンドリアの学者たちは、それ以前から存在しそれ以降も世人に読まれることになるテキストには何の影響も与えなかったとされ[43]。

（B）　他方の見解では、われわれが今日知るテキストは、アリスタルコスの作った版に他ならないとされる[44]。

分裂したこれら二種の解釈は、それぞれ、以下の二種の、相反するような資料状況に拠っている。

（a）　アレクサンドリアの学者たちによる詩句上の校正案（削除や書き直し案）は、今日われわれの持つ流布版にじっさいに採り入れられた率がかなり低い[45]。

（b）　他方、今日伝わる諸写本における詩句数やその順序は、アリスタルコスの容認したものとほぼ一致している[46]。

そこで、これら対立する意見の折衷案として、出版者たちの関与をここに想定する解釈が出されている。それによると、一種の大学出版とも称される機関[47]に属する人々が、詩句数に関してはアリスタルコスの版に従ったが（Ｂｂ参照）、詩句そのものに関する学者の校正案に対してはとくに顧慮を払わなかったのだ（Ａａ参照）、という。これは、かなりの賛同を得ている[48]。また、流布版即アリスタルコス版の立場をとるハスラムは、ａの点に関連して、アリスタルコスらの版は、テキストを置き換えようとする意図のものではなく、むしろ既存版をベースとしながら、削除案や書き換え案を欄外に付す注釈書の類いだったのだと述べる[49]。

ハスラムら、テキスト研究専門家の意見には傾聴せねばならないが、もしここで出版者たちの少なからざる関与を想定するのであれば、彼らの判断力や実際の刊行の仕方にも、ある程度の独自性を認めねばならない。彼らは、学者たちの提案の一部、つまり詩句数などの考えは採用したが―「採用した」というのはハスラムらの見解による―、一部、つまり個々の詩句上の訂正案については、ほとんど相手にしなかったのである。

ところで上記ｂについて、ハスラムらが、「詩句数」のアリスタルコス版と流布版との間の対応性を述べる場合に、いわゆるエクセントリックな余剰詩句は両版から省かれているという点を挙げる一方、アリスタルコスによって（「エクセントリック」な詩句以外に）削除されるべしとされた詩句については、その「詩句数」の勘定には入れない[50]。だが、もしそのように削除すべしとされた詩句も「詩句数」の勘定から除いたものを、それが全体的な

校訂本だったにせよ注釈書だったにせよ、ほんらいのアリスタルコス版と見なすのなら―そうすべきであるはずだが―、「詩句数」においても流布版とは異なるものに―それより短いものに[51] ―なるのである。

たしかに、諸パピルス断片や、古注の記述や、他作家における引用を通じて知られる余剰詩行が、流布版、すなわち今日の刊行本のテキストの大本を成す中世諸写本ではたいてい省かれているという状況がアリスタルコスの功績によるという見方[52] は、ある程度は蓋然性がある。余剰詩行へのアリスタルコスの批判が伝えられているケースもたしかにあるのである。しかしそれは、資料数的にあまりにも少ないので、そのような批判が系統的に行なわれていたか断定できるほどではないし、そう伝えられている例では、その余剰詩行の不適切さ、「エクセントリック」性が、アリスタルコスならずとも誰にも明らかという種類のものであると感じさせる[53]。

アリスタルコス積極関与説をそのように唱える学者は、上記の、前二世紀からテキストが安定してくるという点も挙げるだろうが、それは単なる傍証的な状況証拠の一つに過ぎず、彼らの論拠は強いわけではない。

むしろ、アリスタルコスの礼賛者の一人であるモンロー自身が述べるように、「エクセントリック」なテキスト異同が残らなかったのは、より良いテキストとの競合を通じて、伝承の過程で自然に淘汰されていった結果だとも見なしうる[54]。ダーウィニズム的解釈法と呼ぶべきかもしれないが、それ自体で納得しうる議論である。アレクサンドリアの学者たちの校合作業が、諸版の比較を容易にし、その結果それだけ「生存競争」を強め、淘汰を早めた、ということは言えるだろう。

この問題に限らず、総じてアリスタルコスらの校正案が、流布版の形成にとくに決定的な影響を与えたとは判断されない[55]。例えば、『イリアス』一八巻三九－四九行におけるネレイデスの名前の羅列は、アリスタルコスのみならず、それ以前にゼノドトスによっても、「ヘシオドス的性格を持つ」という理由で削除すべしとされ[56]、じっさいにアルゴリス版では書かれていなかったと言われるが、流布版ではそのまま残っている[57]。『オデュッセイア』一巻九七－九八行でのアテナのサンダルに関する描写は、他の箇所でのヘルメスのサンダルに関するものと同一詩句で、ヘルメスのほうによりふさわしい句という判断からであろう、アリスタルコスによって問題ありとされ、じっさいにマルセイユ版では省かれていたらしいが、流布版ではそのままになっている。同一一巻三八－四三行は、ゼノドトス、アリストパネス、そしてアリスタルコスの三大学者によって等しく批判されたにもかかわらず、流布版でやはり無傷のまま伝わっている（同八巻一四二行も同様）[58]。

詩句の諸書き換え案と同様、アリスタルコスの（余剰詩行以上の）さらなる削除案も、上記のように流布版には大部分は採り入れられなかった。例外的な事例として、アリスタルコ

スによって削除されて流布版から消えている箇所ということで、『イリアス』9・458－461が、プルタルコスによって記されているのを、近代の学者がテキストに戻した。したがって、今日読まれる版と中世写本の伝える流布版とは、そういう復元を認めるとすれば、量的に同一ではない[59)]。アリスタルコスの削除に由来するかどうか分からないが、やはり中世流布版にない部分が近代の学者によって戻された箇所として『イリアス』8・548、550－552がある[60)]。しかし、そういう例は僅少である。書き換え案も削除案も、いずれも、多くの学者の意見によると、注釈書的または欄外注的な形式の中に収められていた[61)]。そうとすれば、取り扱われ方に差別はなかったわけである。したがって詩句数の点（上記b参照）にも、流布版を発行した側の独自性が確かめられると言える。少なくとも、盲従的ではなかったのである。アリスタルコスに好意的な論者（ルートヴィッヒ等）からは、彼の控えめな、慎重な態度が称揚される。しかし、学者の解釈が受け入れられなかったという事実は客観的に存する。そういう点はもっぱら、受容者の、つまり一般読者の、要求に対応していたのかもしれない。そして一般読者の判断は、なかなか良識的であったとも思われる[62)]。

アリスタルコスらは、今日われわれが持つテキスト以外は知らなかったのだ、というファン・ティールの断言的文章は、たしかに言い過ぎであり、勇み足的な筆の滑りであろう[63)]。アリスタルコス以前のパピルス断片には、上記のように、「ワイルド」な異同の数々を示すテキストが少なからず確認され、しかもそれらを学者たちも多かれ少なかれ知っていたと思われるのである。しかし、より近年における諸パピルス資料の公刊がもたらした知見は、そのような読みのバリエーション度が確かめられたこと、しかし前二世紀ころからは「ワイルド」な読みが排除されたテキストに固まってくることに留まるのであり、アリスタルコスらの校訂研究がそういう流布版の形成に積極的に関与したという充分な証拠までは提供していない。むしろ、上で述べてきたように、彼らの校正案は―客観的に見てより妥当な校正案だと思われる場合も含め[64)]―流布版には意外なほどに影響を与えていない。重要なパピルス資料にはまだ接することのなかったルートヴィッヒ[65)]の結論が、けっきょく妥当であると筆者には思われる。ルートヴィッヒあるいはモンローは、アリスタルコスのテキスト批評家としての力量は礼賛しながら、流布版にそれが影響した程度は少なかったと考えている[66)]。それが現実であったと思われる[67)]。

アリスタルコスの解釈法

アレクサンドリアの、いや古代の文献学の頂点を極めたとも言われるアリスタルコス[68)]は、古代人の間で高く評価され、「占い師（マンティス）」とも称された（アテナイオス、六三四C）。「神のごとき」詩人ホメロスたちの真意を正しく読み解く学者、という意味である。何らかの問題点について、アリスタルコスの権威に盲従的に従おうとする場合もあっ

た[69]。これは、ピタゴラス派において、その教説を、祖師の言うことだからと無批判的に受け入れた傾向を想わせる。そのようにカリスマ的に崇拝されことのあったアリスタルコスだが、しかし他方では、その解釈を批判する人々もいたのであり、しかもライバル学派であるペルガモン派のみならず、アレクサンドリアでもそういう人がいなかったわけではないようである[70]。「アリスタルコス攻撃者」というあだ名のPtolemaeus Epithetesという学者がいたともいう[71]。そして現代においても、彼に対する評価は、おおかたは肯定的、称賛的であるが、厳しい意見が述べられることもある[72]。

アリスタルコスの著作は全く残っていないので、写本Aの古注などから彼の意見を推測復元するしかない。どのようなことを述べ、どのような理論を立てていたのか、どこまで彼が「モダン」な方法や学識をすでに得ていたのか、といった点は明らかではなく、学者の間で必ずしも意見が一致しない。有名な、「ホメロスをホメロス（自身）から解明する（ホメーロン・エクス・ホメールー・サペーニゼイン）」という方法論が、アリスタルコスその人によって明確に表明されていたかどうかという点は、確認はできない[73]。しかし、プファイファーも言うように、基本的にはそう認められるだろう。文法学の領域では、アリスタルコスが八品詞論など文法理論をすでに完成させていたという見方と、まだ幼稚な段階にとどまっていたという意見とに大きく分かれる[74]。

そして、本論が扱っているホメロスのテキストに関する校訂の問題であるが、アリスタルコスの案がけっきょく普及版に取り入れられた率は上記のように低かったとしても、とにかく彼の校訂者としての能力は近代的水準に照らして高かったということを、ルートヴィッヒやモンローらは強調し称揚している。彼らにとっては、学的判断において一種完全無欠に近い研究者であり、あたかも、ヴルガータを決定したヴルグス（民）に理解されなかった高等批評の巨人という趣きである。

しかし、彼ら礼賛家は触れようとしないが、アリスタルコスのテキスト削除案や書き換え案、あるいは内容にもかかわる判断や解釈は、ときに主観的あるいは気随的で、今日のわれわれから見て首をかしげさせることもけっして少なくない[75]。

そういう点も視野に含めた、より冷静な、あるいはバランスの取れたアリスタルコス評は、ステファニー・ウェストや、より古いがアトキンスの論評に見出される。ウェスト[76]は、アリスタルコス以降のホメロス批評は、彼の仕事がなかったら大きく異なっていたであろうと、客観的にその影響力を判定する。しかし、より具体的な点で、彼の諸削除案に関して、「たいていはその議論の数々は主観的である」、「伝統的口承的な詩と、書かれた文学との間の相違を認めることがあっても僅かの場合だけなので、彼の議論はわれわれにはときに奇妙に思われる」と述べている[77]。

アリスタルコスの方法の、称賛すべき点と、われわれに首をかしげさせる側面との両方に

関して、アトキンスはさらに率直に記している。一方で、その校訂本や注釈書は、アリスタルコスが、（古代の）全ての批評家のうちで最も健全な者であったことを明らかにしている、彼の広い学識と優れた文学趣味と鋭い良識とは天才的である、と述べ、彼が確立した文学解釈上の諸原理は永続的な価値を持つ運命にあった、などと述べる[78)]。しかし、他方では、その時代の特徴的な諸欠点をアリスタルコスも免れてはいなかった、と言葉を続ける[79)]。彼は、とアトキンスは言う、ときに彼自身の諸原理と矛盾する判断におちいることがある、誤った「ふさわしさ decorum」の基準を当て、ホメロスの社会にアレクサンドリア時代の宮廷式エチケットを適用しようとするときである、と。

アトキンスの論述には、正確ではない点も含まれるが[80)]、アリスタルコスの批評法の表裏両面を多かれ少なかれ公平に見ているとは言えるだろう。

アトキンスの挙げる諸箇所を参考に、アリスタルコスによるホメロス批評の「負」の側面を『オデュッセイア』関連で見ると、例えば、トロイア市内に据えられた木馬の扉の開閉がオデュッセウスに任されていたという詩句（『オデュッセイア』11. 524－5）をこの古代学者は、カッコに入れるべき（削除すべき）とした。それは、ホメロスの英雄にそういう下僕・門番的な役割をさせるのは「ふさわしくない aprepes」と見たからしい[81)]。

第六巻では、スケリアに漂着したオデュッセウスが、みすぼらしい汚らしい様子をしていたのが、水浴をしてオリーブ油を体に塗りこみ、おまけにアテナの力によっていっそう優美にしてもらい、見違えるような姿で現われ出ると、それを見た王女ナウシカアが、わたしにこのような夫がいて、この地に住んでほしいもの、と侍女たちに話す、という箇所がある（6. 244－5）。王女が、そのように結婚の願望をおおっぴらに口にするという点が、アレクサンドリアの学者には、不品行で「ふさわしくない」と思われたらしい。アリスタルコスはこの両行を削除すべし、とし、前の行（244）については（より強い言い方として？）疑わしい、と述べたと古注にある[82)]。同じ箇所の古注からは、244行に関するアリスタルコスのその意見は、すでに抒情詩人アルクマン（断片81）が、そのホメロス句を書き換えて、「乙女たち」の言葉にしているのを参考にしたらしいことが知られる。このアリスタルコスの意見については、すでに他の古代学者から反論が出ていたが、それに沿ってメリーとリドルの注釈書で、結婚することが確実な無邪気な少女の考えを、親しい侍女たちだけの前で口にしたのであり、男たちの前では、しかも父に対してすら、彼女の態度は全く異なって、恥じらいを保持していると、適切に述べられている[83)]。

ファン・デア・ファルクは、現代のアリスタルコス批判の代表者である。アリスタルコスの「素晴らしい観察力」にいちおう触れたり、伝承テキストを「その当時としては可能な最大の注意とともに扱い」、むやみといじったりはしなかった、「その注意深さ、慎み、そして解釈上の新しい諸原理の発見によって、ホメロスの釈義に大きな貢献をなした」などとはし

ているが[84]、全体的には、アリスタルコスの批評法は「散文的」であるとか、「日常生活の現実に対して無感覚」であるとか、「ホメロスをホメロスから（読み解く）」という方法には、他の典拠を参照しないという欠点が付きまとっているとかと述べ[85]、その読み方は主観的である、「（恣意的なテキスト変更を行なった先行学者）ゼノドトスと程度は異なるが、本質的には違わない」などと言って[86]、厳しい見方を隠していない。

ファン・デア・ファルクの議論では、古注において、どの古代学者の解釈か明示がない「無記名」の注記の場合も、多くがアリスタルコスの考えを伝えているとされるが[87]、この点は基本的には判断を留保すべきかもしれない。ただ、アリスタルコスの諸見解は、古代の学界において―それを通じてより広い範囲にも―大きな影響を及ぼしたので[88]、ある程度の部分はじっさいにその可能性があると言える。

ファン・デア・ファルクの諸論点はここで詳しくは取り上げないが、既述の「ホメロスからホメロスを」という方法論に関連して、アリスタルコスの「ドグマティズム」的な過ち[89] が指摘されている。神話的な解説などにおいて、彼はホメロスと「より後代の詩人たち（ネオーテロイ）」つまりヘシオドスやキュクロスの作者たちとを峻別し、後者的な特徴と彼の信ずる要素をホメロスのテキストから排除しようとした（つまり、校訂本の欄外にそういう意見を記した）。例えば、ぶどう酒の神としてのディオニュソスは、彼の考えでは、ホメロスには知られていないはずである、したがって、ホメロスにおける言及（『オデュッセイア』24・74）は「ネオーテロイ」的であるとして削除すべしとした[90]。また、校訂において、伝承テキストの改変そのものを行なうことには慎重であったと称賛されるアリスタルコスだが、その彼も大胆な書き換えに踏み切ることがあったという例が、少数と思われるが、知られている。木馬の中で「ダナオイ（ギリシア人）のうち、他の全ての将や領主たちは」恐怖に震えていた（しかし、ネオプトレモスは別だった）、という『オデュッセイア』11・526の詩句をアリスタルコスは、「木馬において他のアカイア人（ギリシア人）は全て」に大きく変更したという。つまり、震えていたのは一般兵卒という趣旨にさせ、英雄たちの名誉を―「ふさわしさ」の観点から―救おうとしたということらしい[91]。さらに、アリスタルコスの方法は必ずしも首尾一貫していないという点にも触れられている[92]。

ここでは、ファン・デア・ファルクらに同調しながらアリスタルコスの欠点ばかりをあげつらうことを目的にしているわけではない。彼が、ホメロス批評を大きく推進し、古代で最も顕著な貢献をなした文献学者であることは間違いないだろう。しかし今は、その彼の方法にも、客観的に見て遺憾とせざるを得ない欠陥面がしばしば認められることを確認しているのである。そういう側面に関して、ファン・デア・ファルクは、主観的恣意的なテキスト変更や解釈に走りがちな「時代の子」的傾向からアリスタルコスも免れていなかった、と述べている[93]。しかし、彼の方法によって折々明らかにされる別の種類の傾向にもここで注意

を払っておきたい。例えば、上記のようにナウシカアの場面で、アリスタルコスは、乙女らしい願望が自然な文脈の中で述べられている箇所を、彼の設定した基準に照らして、削除すべしと見なした。これは物理的な意味での文字通りの「縮小化」を示しているが、他に、テキスト変更によって、ホメロスの描く世界を―意図的ではないにせよ結果的に―より卑近化させようとするケースもある。「ホメロスをホメロスから」という方法論は、その観点から言うとけっして誠実に守られてはおらず、むしろ外的な枠を無理やり押し付けようとすることがあったわけである。その枠は、客観的に見て、ホメロスには小さすぎる場合が多い。そのように、上で述べたテアゲネスの方法とは意味的に異なるが、アリスタルコスら古代の代表的な学者たちにおいても、ホメロスの読み方に「縮小化」の傾向が付きまとっていることが認められるのである。

注

1）Cf. Schmid 113 n.2（Odysseia [ōdē]), *Der Neue Pauly* 5（Latacz), 694（ヘロドトスではOdysseiē)。「ヘラクレスの歌Hēraklēïs（Hērakleiā)」などと類比的（Latacz, ib.)。

2）Jacoby 160.

3）「分離派」に対して、古代の文献学の第一人者アリスタルコスも明確に反対した（Pfeiffer 230 n.7)。現代では、例えばJanko（vid.index ‘Homer, composed both epics’）が「統一派」に挙げられる。

4）Haslam 60sq. ホメロスの写本は、パピルス断片を含めて、千を超える（Haslam 60)。最も古い時代にさかのぼるパピルス断片は前三世紀のものである。

5）*Lexikon der Alten Welt* ‘Rhapsoden’.

6）ディオン・クリュソストモス53・6－7参照。

7）G．ハイエット（柳沼重剛訳）『西洋文学における古典の伝統』上（筑摩書房　1969)、一五頁。

8）Vid.Haslam 80sq.

9）A.Parry, Have we Homer’s Iliad? ,1sqq.,e.g.26 ‘Homer himself knew the art of writing’, 27 ‘the Iliad will somehow have been put into writing at the time of its composition.’

10）Haslam 79.

11）Vulgataの概念は必ずしも明瞭ではない（cf.Nagy, ‘Hom.Schol.’ 114, 118sqq.［koinēまたはkoinaiに関して］)。ここでは、まずは、中世諸写本がほぼ共通して示すテキスト、という意味で用いる。

12）S.West 45, 47; Haslam 56, 64.

13）Van Thiel ad loc.

14）余剰詩行（plus-verses）の具体例として、Monro 420-430、Haslam 66sqq.,74sq.（パピルス）参照。現代の校訂本で、パピルスの余剰詩行をもテキストに取り込んでいるものもあるが（vid.Haslam

66 n.24)、ファン・ティールによるものは―古典作者の引用や古注や一部少数写本から補うものは除いて（cf.van Thiel, Od.XIII, n.22）―、この点より保守的である（フォン・デア・ミュールのものはさらにそうである）。ファン・ティールは、アッパラートゥス・クリテイクスに、パピルスの異読は記しているが、余剰詩行は多く無視している（cf.e.g.ad Il.18.608, Od.5.24. ただしIl.24.804[804a],Od.11.638a,12.133a等については記している）。ウェストの『イリアス』校訂本は、より詳細なアッパラートゥス・クリテイクスを示す。アレン版をファン・ティールは厳しく批判するが、少なくともアレンは（パピルス資料についてはやや古いだろうが）余剰詩行をアッパラートゥス・クリテイクスで多くの場合に記している点で、『オデュッセイア』の異読に関しては、より参考になる（cf. e.g.ad Od.1.93ab,13.197a）。他方、「不足詩行」（minus-verses, cf.van Thiel, Od.XIIIsq.）については、ファン・ティールは流布版に従ってそのままテキスト本文に入れる一方、アッパラートゥス・クリテイクスではパピルスの状況も注しているので（e.g.ad Od.2.407,vid.XIV n.24）、余剰詩行の扱い方と異なっている。

15）Haslam 69; M.L.West 184. S.West（40）は、コピーする側にも原因（‘misplaced creativity of copyists’）があると考える。

16）『オデュッセイア』22・347sq.（345 aoidon）. プラトンは、オルペウスらとともに彼をもラプソードスと呼ぶが、ルースな言い方だろう（『イオン』五三三bc）。

17）Cf.Burkert, 205sq.; *Lexikon der Alten Welt* ‘Aoidos’（G.Knebel）; Nagy, *Pind.Hom.* 54 ‘a verbatim repetition–not an act of recomposition’（rhapsodoi,kitharodoi,aulodoiの口演について）.

18）*Der Neue Pauly* 10 ‘Rhapsoden’（Latacz）.

19）前の点について、*RE* VIII2, 2148（Rzach）’So war einer oder der andere...neben seiner berufsmäßigen Beschäftigung auch selbst in gewissem Maße dichterisch tätig’ 参照。また後者の点については、Pfeiffer 12（‘minor poets’）参照。

20）*Lexikon der Alten Welt* ‘Homeriden’（Knebel）.

21）ピンダロス『ネメア第二歌』古注II 1c。しかしBurkertはこの点に懐疑的である（e.g.196）。

22）M.L.West ‘Geschichte der Überlieferung’ 184. Cf.Schol.T ad Il.10.1（ペイシストラトスが挿入させた、と）.

23）Pfeiffer（8sq.）のように、クセノパネスのような人物を「ラプソードス」（cf.21 A 1 Diels-Kranz）と言い切ってしまうのは疑問である。Pfeifferの言うように、彼は初めはラプソードスとして歩み出したと思われるが、やがてホメロスのテキストの暗誦的吟唱詩人から脱して（ステシコロスに関してPfeiffer同処参照）、むしろ自然哲学者的詩人とでも称すべき独自の境地に達したのである。引用したクセノポン『饗宴』の「ラプソードスたちほど愚かな者はいない」という言葉と比較参照。ただしPfeiffer自身、テアゲネスとクセノパネスらをはっきり区別している場合もある（42）。

24）M.L.West, ib.184.

25）Pfeiffer 8 ‘it was poetically gifted or at least poetically minded people[rhapsodes], who made the first attempt at interpreting the heritage of the epic age’. なおPfeifferは、他の研究者たちとともに、すでにホメロス自身が自分の詩句の「釈義者」だったとも述べている（ib. ‘one may even regard it as a continuation of the earlier self-interpretation of the poets’ [cf.ib.3sq.,226]; cf.*Der Neue Pauly* 9, ‘Philologie’ 836sq.）。

26）Pfeiffer 67, 158. そこでは、Dionysius Thrax への古注（Diels-Kranz　8・1a）およびDio Chr.36.1が参照されている。なお、近代の学者は、アリストテレスをPhilologie（真に学問的な文学研究）の創始者とするが、この見方（W.Jaeger等）にPfeifferは反対する（67 et alibi,彼の teleological philosophyに従属した仕事だ、と）。しかし、筆者はむしろそれで大過ないと考える。例えば、Pfeiffer自身の説明 ‘he（Ar.）used the…treasures of his collections for the correct interpretation of the epic poet against less learned predecessors who had raised subjective moral arguments without being aware of historical facts’（70）, ‘after referring to Protagoras’ criticism of Homer’s ‘incorrect’ use of the gender, Aristotle…proved that Protagoras, not Homer, was wrong’（77 n.1）等参照。古文書や碑文資料に基づく、ピュティア競技勝利者リストやアッテイカ劇のdidaskaliaiの研究（ib.80sq.）も、アリストテレスの同様の学問的態度を物語る。

27）Diels-Kranz　8・2.

28）Diels-Kranz　8・2.

29）「戦傷」の例は『イリアス』13・569。そういう例は、アレゴリーというより、メトニミの名で呼ばれる（cf.Quint.8.6.24, H.Lausberg, *Handbuch.d.Lit.Rhetorik*, Stuttgart 1990[3.Aufl.],p.294）。

30）Cf.Jacoby 185（‘die Überzeugung von dem Walten einer göttlichen Gerechtigkeit’）.

31）‘kalon anthrōpinou biou katoptron（speculum vitae）’ apud Arist.Rhet.1406b12-13（cf.Pfeiffer 51; W.B.Stanford, *The Ulysses Theme*, Oxf.1968, 96）.

32）Cf.Der Neue Pauly 9, 837 ‘auf …vermeintlichen rationalen Kern zu reduzieren.’

33）Diels-Kranz　61A4。

34）「諸都市版（hai kata tās poleis, hai apo tōn poleōn）」についてPfeiffer 94, 110, Haslam 69sq.参照。ここに挙げた他に、キオス、シノペ、クレタ、アイオリスの版があったと伝えられる。なお、「標準版」としてのアテナイ校訂本（前六世紀ペイシストラトス時代の成立？）の可能性について、Pulley 46 n.4参照。この点についてPfeiffer 110（否定的）、S.West 46（否定的）、Haslam 71（否定的）, Nagy ‘Hom.Schol.’ 120（前四世紀に成立、と）も参照。

35）諸都市版は、それぞれの都市で公認され、土地の祭典などで吟唱されるためのテキストに用いられたものだという説の他に、単にその場所でアレクサンドリア図書館のために購入ないし入手されたという事情による命名だという説とがある（vid.Monro 431 n.79.）。

36）同箇所古注A（katēpheiēnに関して）, cf.Monro 433.

37）ヴィラモヴィッツの意見（ap.Haslam 87）、S.West 41も参照。しかしこれはやや誇張し過ぎとHaslam（ib.）は述べる。

38）プルタルコス『アレクサンドロス伝』八（hē ek tou narthēkos[Ilias]）。

39）むしろ、大王自身が手を入れたものという伝承もある（ストラボン13・594）。Cf.Monro 418.

40）アンティマコス版＝Hē Antimakhou（ekdosis）、諸個人版＝ Hai kat' andra（cf.Pfeiffer 94, Haslam 69sq.）。他に、リアノス、ピレモン、ソシゲネス、アリストパネスの個人版が、アリスタルコスによって参照された

41）アンティマコスの書は、後のゼノドトス（prōtos tōn Homērou diorthōtēs）らのものと異なり、諸写本の研究に基づく校訂本とは言えないとPfeiffer（ib.）は述べている（cf.van Thiel, *Hom.Od.*x）。また、ピレタス（コス出身の詩人）や、「『イリアス』と『オデュッセイア』の校訂」という九巻の書をあらわしたというクラテス（ペルガモン派）によるものも、ほんらいの校訂本というより、注解書というべきものであったろうと推測される（Monro 431）。

42）前四世紀に基礎が置かれ、次の世紀に拡張された。前四七年に火災に遭ったこの図書館の蔵書に関するその後の運命について、Pulleyn 43 n.1参照（大火災ではあったものの、全部は焼かれなかったかもしれない、いずれにしても残っていた図書は、後六四二年に、カリフの命令で全て焼却された）。

43）Ludwich、Allenやv.Thielらの見解（vid.Haslam 84sqq.）。 ファン・ティールはこう断言的に記す（*Hom.Od.*vi）‘Auch die Alexandriner kannten keinen anderen als unseren Text’（Jankoがこれに賛同する）。ルートヴィッヒの、*Die Homervulgata als voralexandrinisch erwiesen*（Leipzig 1898）という著書の題名参照。ルートヴィッヒは、アリスタルコスの校訂者としての力量は高く評価するが、すでにホメロスのテキストは固まっていたと考え、アリスタルコスはそれに手を加えることは控えた、あるいはそうすることはできなかったとする（*Aristarchs Homerische Textkritik* …,II,Leipzig,1885,136 ‘wie stark er（Aristarch.）unter dem Banne der guten Ueberlieferung stand’, 447 ‘die Hom.Ueberlieferung shon sehr frühzeitig eine gewisse Consistenz erhielt…’, et al.）。ただし彼の研究は、パピルス資料として重要なオクスリュンコス・パピルスが発行され出す（1898）より前のものである。

44）WolfやHaslamらの見解。ヴォルフは、先行研究者Giphaniusの見解に賛同しつつ、アリスタルコス版がすぐにヴルガータになったと言う（199 ‘vulgatam nostram recensionem esse ipsam Aristarcheam’、186‘ex quo Aristarchea ἀνάγνωσις facta erat παράδοσις,（vulgata lectio, vulgatus textus, dici solet, et satis commode,）id quod mature factum videtur’）。ハスラムは、ある程度譲歩しながらも、こう述べる（85）‘It seems that the Alexandrians, and Aristarchus in particular, more or less established it（the standard text）. This is what we know as the vulgate. If it had any discrete pre-Alexandrian existence, it is clear that it did not become the vulgate,

the standard text, until the time of Aristarchus .'

45）Haslam 56, 84sqq. Cf.Ludwich,II,135n.114 'Von ihm（Aristarch.）athetirte Verse wurden anstandslos weiter fortgeführt und sogar von den Aristarcheern wie echte verwendet'. Ludwich（ibid.135sq.）は、アリスタルコスのみならずゼノドトス（とアリストパネス）によっても真正ならずと校訂批判されていた詩句がそのまま流布版に残っている顕著な例として、『オデュッセイア』11.38－43や、『イリアス』18.39－49等を挙げる（後者はアルゴリス版にも含まれていなかった）。学者たちの案の採用された割合の低さが、Pulleyn 49sq.に数字で示されている。なお、彼らの具体的な校正案は、アレクサンドリアで行なわれた研究を抜粋的に伝える古注（より後代のものを除く）を通じて知られる、あるいは復元的に推測される。古注A（Venetus A）の注解は、アリスタルコスにさかのぼると言われている（cf.Pulleyn 50）。

46）ちなみに、ゼノドトス版は流布版よりも短かったらしい（Haslam 73sq.）。

47）大図書館兼研究所（Museum）に付属する一種の大学出版（a virtual Alexandrian University Press）だったとHaslam（85）は言う。

48）E.g.S.West 47; Haslam 84; M.L.West 'Geschichte der Überlieferung' 185.

49）Haslam 85 'commentary or marginal annotation', ib. 'Neither their atheteses nor their readings were meant to supplant the given text, nor did they: they were scholarly apparatus in attendance on the received text'（cf.Ludwich, Ⅱ, 135 n.114, Pfeiffer 215）.

50）Haslam 84 'The number and sequence of verses in our manuscripts（unevenly attested verses[plus-verses] excluded[in the counting]）conform with near perfect exactitude to the verses recognized by Aristarchus（verses which he athetized included[in the counting]）.'

51） Haslamによると（73sq.）、ゼノドトス版がそうであるように。

52）M.L.West, *Hom.Ilias*, VII（'Aristophanis …Aristarchique auctoritas'）; F.Schironi, in: Finkelberg（ed.）, 89 'the text of the Iliad and the Odyssey that we still read today is basically due to him（Ar.）as far as the NUMERUS VERSUUM is concerned. He fixed a "standard text" of Homer by deleting many PLUS-verses…'（cf.576）.

53）流布版に残らなかった余剰詩行で、しかもアリスタルコスがそれを無用であると述べていたことが伝えられているケースは、以下のような例である。

Ilias 9.159　Touneka kai te brotoisi theōn ekhthistos hapantōn

159a　hounek' epei ke labēsi pelōr（?）ekhei oud'aniēsin

それで、人間たちにも、彼（ハデス）は神々のうちでいちばん嫌われているのだ

―いったん（人を）捕らえると、恐るべき神は（？）、留めて離さないが故に。

これについてアリスタルコスは、「いくつかの写本（または校訂本）は、この行（一五九行）に、「いったん捕らえると…」（一五九a）を付している、しかし、なければならない詩句ではない」と述べて

いたという（古注Ａ、Ｔ）。引用詩句の前では、

ハーデースは宥めがたく、強情な神だ（一五八行）

と言われており、その理由として一五九行が続けられる。これだけで十分であり、それにさらに一五九ａ行を付けるのは、余分でくどい感を与える。これに限らず、パピルス断片に見られるのも含め、余剰詩行はしばしば冗長な拡張になっており、ラプソードスたちの口演における引き延ばしに由来するのではないかという疑いが持たれている（cf.S.West 47）。アリスタルコスの意見は、常識的な感想とも一致する。

パピルスに見出される余剰詩行で、アリスタルコスあるいは他の学者が問題にし、おそらく削除すべしと注したとみられる例として、『イリアス』第一八巻の盾の図像に関連するものがある。人間世界のさまざまな場面を記述したあと、六〇七－六〇八行で、世界を取り巻く大河オケアノスに言及し、これが盾のいちばん縁をなしていたと述べられる。これは、ここの描写を完結させる詩句として適切である。ところが、あるパピルス（五一番）では、さらに港がそこには描かれ、イルカたちが魚の群れを狩りする、という詩句が四行付け足される（六〇八ａ－ｄ）。この例も、内容的に余計な延長であることが明らかである。伝ヘシオドス作『盾』二〇七－二一三行に、同様の詩句が見出され、こちらを参考にラプソードスが拡張した疑いがある。そしてこれらの行六〇八ａ－ｄには、そのパピルスで、「ディプレー（二本線）」の目印（≻）が左端についている。これは、学者たちがなんらかの注記をそこに加えているという意味である。ウェスト（app.cr.ad loc.）によると、六〇八ａ行には「オベロス（横線）」（―の印）も付けられていたのではないかということであり、もしそうとすれば、削除案が明瞭に表わされていたわけである（オベロスは、削除すべしという詩行の表示のためにゼノドトスによって発明され、アリスタルコスにも受け継がれた記号）。

Il.18.607 en d'etithei potamoio mega sthenos Ōkeanoio

608 antyga par pymatēn sakeos pyka poiētoio

≻608a en de limēn etetykto eanou kassiteroio

≻608b klyzomenōi ikelos doiō d' anaphysioōntes

≻608c argyreoi delphines ephoineon ellopas ikhthys

≻608d tou d'hypo khalkeioi treon ikhthyes autar ep'aktais

また彼（ヘパイストス）はそこに、大いなる力を持つオケアノス河を、

堅牢に造った盾のいちばん縁に沿って、象った。

［またそこには、精錬した錫によって、波さざめく様子を見せる

港が造られていた。そして二匹の白銀のイルカが、

潮を吹きながら、鱗持つ魚たちを餌食にしていた。

彼らに追われて、青銅の魚たちは、逃げ惑っていた。しかし、浜辺には　］

この場合も、学者たちの判断は、常識に合致する。

アリスタルコスらが意見を述べていたかどうかは分からないが、余剰詩行として顕著な『イリアス』結末に関する例に言及しておこう。結末は、中世諸写本で次のように一致している。

Il.24.804　Hōs hoi g'amphiepon taphon Hektoros hippodamoio.

そのように彼ら（トロイア人たち）は、ヘクトールの埋葬をとり行った―馬を御する彼の。

ところが、T写本の古注は、古代のいくつかのテキストで、ここの最後の部分hippodamoio「馬を御する彼の」という句を別のものに置き換えた上で、もう一行（804a[cf.Allen,ed.maj.]と表記する）をこのように付け足すものがあったことを伝える。

804（Hōs hoi g'amphiepon taphon Hektoros), ēlthe d'amazōn,

804a　Arēos thygatēr megalētoros androphonoio.（804-804a）

（そのように彼ら（トロイア人たち）は、ヘクトールの埋葬をとり行った)、するとアマゾーンがやって来た、

大いなる心を持つ人殺しのアレースの娘が。

また、或るパピルス断片（643番）でも同様の状況が見出されるが、その余剰詩行のテキストは少し異なっている。

804（Hōs hoi g'amphiepon taphon Hektoros), ēlthe d'amazōn,

804a　Otrērēs（?）thygatēr eueidēs Penthesileia.（804-804a）

（そのように彼ら（トロイア人たち）は、ヘクトールの埋葬をとり行った)、するとアマゾーンがやって来た、

オトレーレーの（？）娘、見目よいペンテシレイアが。

八〇四a行は読みが不確かだが、とにかくこの余剰詩行は、むしろ、アマゾンのトロイア加勢やその女王ペンテシレイアの戦闘を扱った『アイティオピス』（叙事詩の環の一）の出だしとすべきではないかとも解される（『アイティオピス』をキュクロスに属させるために、後代のラプソードスが作った詩句、という解釈などがある[cf.Bernabé p.69]）。いずれにせよ、『イリアス』の写本の一部がそうなっていたというが、流布版には入らなかった。この余剰詩句は、この後にまだ話が続くことを思わせ、『イリアス』を締めくくるのにはふさわしくないことが明らかである。今述べたように、アリスタルコスが、この詩行について何か言っていたかどうかは分からない。

『オデュッセイア』関連では、余剰詩行についてアリスタルコスらが批評したというこの種の資料は知られていないようである。

54）Monro 447 'If there were interpolated and otherwise 'eccentric' copies, such as are being found in the papyrus rolls of Egypt, these were not got rid of by the obelus of the critics, but by the superiority which better and 'nicer' copies（χαριέστεραι）had in the struggle for existence ', 448 'the collective agency'（ルートヴィッヒの論に沿っている[430sq.]）。

55）Cf.e.g.Monro 447 'In this case[Il.1.91]…and in the many similar cases, the authority of

Aristarchus did not prevent the reading which he and other leading grammarians condemned from gaining a place in the vulgate.'

56）Schol.A ad loc.（hōs Hēsiodeion ekhōn kharaktēra）.

57）Cf.Ludwich, II, 136.

58）Cf.Ludwich, II, 135-6.なお、ルートヴィッヒは、アリスタルコスが、校正案に関して、客観的な証拠がない場合は自分の意見をごり押しせず、問題ありという意思表示にとどめ（obelizein=atheteiｎ[Ludwich,II.134 n.111]）、削除する（ou graphein）ことまではしなかったという態度に、称賛的な趣旨で言及している。Cf.Pfeiffer 215 'he（Aristarchus）did not make new separate editions of the text, but accepted the 'vulgate' text（the koinai ekdoseis）for general use'（H.Erbseの意見を引いている）.

59）Cf.v.Thiel ad loc. 'textui inseruit Lederlin anno 1707 ex Plut.2,26F,qui versus ab Aristarcho remotos esse contendit.'

60）Ex Plat.Alcib.ii.149d…addidit Barnes（v.Thiel）.なお、アイスキネス（Tim.149）によって伝えられる余剰詩行、『イリアス』23・81a、83abは,近代のテキストにはふつう入れられない（アリスタルコスらが何か意見を述べたかは知られない）。

61）H.Erbse（Pfeiffer 215）, Haslam 85, v.Thiel, *Hom.Il.*Ⅲ n.1 'Es scheint…sicher, dass Aristarchs beide "Ausgaben" Randapparate neben den Homertexten waren…'（cf.ibid.V）. しかし、アリスタルコス独自の全体的な校訂本も出版されたとも論じられ、研究者の間で意見が一致しない（cf. *Der Neue Pauly* 'Aristarchos' 1091）。Finkelberg（ed.）, *Hom.Enc.* 'editions'.

62）学者たちの仕事と一般読者の受容の相互関係について、S.West 47sq.は、より微妙で冷めた、あるいは折衷的な見解を記している。

63）V.Thiel ,*Hom.Od.*vi.なお、彼のテキストは、少なくともアッパラートゥス・クリティクスが簡便すぎる点では物足りない。したがって、『オデュッセイア』に関しては、この点では、今でもアレン版が重宝である。

64）Cf.Monro 447sq.

65）*Ar.Hom.Textkritik*は1885年の出版。1890年以降刊行のパピルスについてMonro 423sqq.参照。

66）Ludwich,II,136（et alib.）; Monro 447（cf.429sq.）.しかし、van der Valkは、流布版への「尊敬」とともに、アリスタルコスらの学問的方法への非難を表明する（cf.Haslam 87）。

67）読者のレヴェルや需要などとの妥協という観点からDavison（224 'against his[Ar.] own personal feelings about what was truly Homeric'）やPfeiffer（215）はそれを捉えている。

68）Cf.L.Cohn, *RE* 2（1895）, 862 'Höhepunkt philologischer Kritik und Gelehrsamkeit im Altertum'; Finkelberg（ed.）, *The Hom.Encycl.*89（Schironi）, et al.

69）Cohn 863, Pfeiffer 232, S.West 45. Cf.e.g.schol.A ad Il.2.316 'peithōmetha（peithometha?）autōi（Ar.）

hōs pany aristōi grammatikōi', id. ad Il.4.235（「たとえヘルマッピアスが正しいように思われても、アリスタルコスに従うべきである」）.

70）Cf.e.g.schol.ad Od.4.511;23.310-43 'ou kalōs ēthetēken Ar…'. Cf.Athen.177e. Cf.van der Valk 111 n.5, Pfeiffer 229.

71）Cf.Monro 444.

72）アリスタルコスに対する称賛的評価については、Pfeiffer 210sqq. 'Ar.:The art of interpretation'; Cohn（ibid.); F.Schironi ,Finkelberg（ed.）, *The Hom.Encycl.*89 'Many of his observations are indeed extremely modern and subtle' 等参照。他方、否定的評価をA.Nauck（apud Cohn 867 'willkürliche Conjekturalkritik', 'den Homertext verschlechtert', etiam ap.Monro 445 n.92[ad Il.1.5]）や、van der Valk が表明している。彼の、'we will conclude this discussion with a word of appreciation of this great critic[Ar.]' [285]という言葉（伝承テキストを慎重に扱ったという点に関連して）は、ややリップサービス的にも聞こえる（van der Valk の論について後記参照。またPfeiffer 233 n.3, Haslam 87参照）。

73）Apud Porphyr.,Quaes.Hom.,ed.Schrader,p.297. Cf.Pfeiffer 226-7（やや留保的だが、その「精神」はアリスタルコス的と認めうる、と）、van der Valk115 s qq.（前提的に認めている、ただしそのdrawbacksに言及して 'carried to far' [117]と述べる）.

74）Cf.S.Matthaios 19-32.

75）Pfeifferもそれをとりあえずは認めている（231 'the negative aspect of Aristarchus' Homeric criticism'）。

76）S.West 45-48.

77）Ib.47.

78）Atkins 188 'the sanest judicial critic', 'genius', 'permanent value'.

79）Ib.189-190.

80）典拠箇所としての古注への参照指示（190 での諸注記）は一部不正確。またアリスタルコスの批評法に関して、decorum（aprepes）の観点だけにしか触れないのは不十分である（例えば「ホメロスからホメロスを」という方法論に関して後記参照））。Cf.Pfeiffer 231 n.3.

81）ただし、他のたいていの場合と同様、ヴルガータにはそのまま残し、何か欄外にそういう意見を示す印を付す（athetein, cf.Pfeiffer 231）だけにしておいて、注釈書Hypomnemataでその点を論じたとみられる（Sch.ad Od.11.525）。

82）Sch.（H.Q.）ad Od.6.244,245.「削除すべし（と見なす）」と訳したのはathetei,「疑わしい（とする）」と訳したのはdistazei.

83）Sch. ad loc., Merry/Riddell ad loc.

84）Van der Valk 122, 285, 125.

85）Ib.111, 114, 115.

86）Ib.152, 156（cf.152）.

87）Van der Valk 111, et alib.

88）一つの具体例を挙げると、Od.18・368 en poiēiに関してアリスタルコスは、オデュッセウスという英雄が「草刈り」をしようと言うのは「ふさわしくない」ので、むしろ「デメテルの草（つまり穀物）」の意だと説いたが、この奇妙な釈義は、Etymologicum Magnumや、Apollonius Sophistaや、Hesychiusや、Eustathiusにまで受け継がれている（van der Valk 115 n.2）。

89）ホメロス即アテナイ人という彼の主張（伝プルタルコス『ホメロスについてⅡ』二, cf.S.West 39 n.18）もこの類いである。

90）Van der Valk 116.

91）Van der Valk 155.

92）Ib.152sq.

93）Ib.152 'the readings of Aristarch are subjective…he was entirely influenced by the mentality and critical methods of his days', 156 'a child of his time'.

＃文献（抜粋、略号を含む）

T.W.Allen, *Homeri Opera,* Ⅲ-Ⅳ(Od.), Oxford 1917-1919(second ed.).

J.W.H.Atkins, *Literary Criticism in Antiquity*, I, Cambr.1934(1961).

A. Bernabé , *Poetae Epici Gr.*,I, Leipzig 1988.

A.Bogardo, 'Homer(Homeros)', *Der Neue Pauly* Suppl.7(Die Rezeption der antiken Literatur), 323-372.

W.Burkert, 'Kynaithos, Polycrates, and the Homeric Hymn to Apollo', in: *Kleine Schriften* I, Göttingen 2001, 189-197.

Burkert, 'The Making of Homer in the Sixth Century B.C.: Rhapsodes versus Stesichoros', ib. 198-217.

J.A.Davison, 'The Transmission of the Text', in: Wace/Stubbings(edd.), 215-233.

Der Neue Pauly, H.Cancik/H.Schneider(edd.), Stuttgart/Weimar 1996-.

Diels-Kranz（ディールス・クランツ）=*Die Fragmente der Vorsokratiker,* H.Diels/W.Kranz, Berlin 1956(8.Aufl.).

G.Dindorfius, *Scholia Graeca in Homeri Odysseam*, I-Ⅱ, Oxonii 1855.

H.Erbse, *Scholia Graeca in Homeri Iliadem(Scholia Vetera),* Ⅰ-Ⅶ, Berolini 1969-1988.

M.Finkelberg(ed.), *The Homer Encyclopedia*, 3 vols., Chichester 2011.

R.Fowler(ed.), *Homer*, Cambridge 2004.

M.Haslam, 'Homeric papyri and transmission of the text', in: Morris/Powell(edd.), 55sqq .

A.Heubeck/S.West/J.B.Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey,* I, Oxford 1988.

Heubeck/A.Hoekstra, *A Commentary on Homer's Odyssey*, II, Oxford 1989.

F.Jacoby, Die geisitige Physiognomie der Odyssee, Antike 9(1933), 159-194.

R.Janko, *The Iliad: A Comm. IV*, Cambr.1992.

J.Latacz/Th.Greub/P.Blome/A.Wieczorek, *Homer*, München 2008.

Latacz, 'Epischer Zyklus', *Der Neue Pauly*, Band 3(1997), 1154sqq.

A.Lesky, 'Homeros', *RE* Suppl.11(1968),687sqq.

Lexikon der Alten Welt, C.Andresen et al.(edd.), Zürich/Stuttgart 1965.

A.Ludwich, *Aristarchs Homerische Textkritik*, Ⅱ, Leipzig 1885.

S.Matthaios, *Untersuchungen zur Grammatik Aristarchs*, Göttingen 1999.

W.W.Merry/ J.Riddell, *Homer's Odyssey, Vol.I*, Oxf.1886.

D.B.Monro, *Homer's Odyssey Books XIII-XXIV*, Oxf.1901.

I.Morris/B.Powell(edd.), *A new companion to Homer*, Leiden et al., 1997.

G.Nagy, *Pindar's Homer*, Baltimore 1990.

Nagy, 'Homeric Scholia', in: Morris/Powell, 101-122.

A.Parry, Have we Homer's Iliad?, in: J.Wright(ed.), *Essays on the Iliad*, Bloomington/London 1978, 1-27.

R.Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from the beginnings to the end of the Hellenistic age*, Oxf.1968.

S.Pulleyn, *Homer Iliad I*, Oxford 2000.

RE=*Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, G.Wissowa et al.(edd.), Stuttgart/Weimar 1893-1980.

W.Schmid, *Geschichte der griechischen Literatur*, Ⅰ, München 1929.

M.van der Valk, *Textual Criticism of the Odyssey*, Leiden 1949,

H.van Thiel, *Homeri Odyssea*, Hildesheim 1991.

Van Thiel, *Hom.Ilias*, Hildesheim 1996.

P.von der Muehll, *Homeri Odyssea*, Basel,1961.

A.J.B.Wace/F.H.Stubbings(edd.), *A Companion to Homer*, London 1962.

M.L.West, 'Geschichte der Überlieferung', in: Latacz/Greub/Blome/Wieczorek(edd.), 182-194.

M.L.West, *Homerus Ilias*, Ⅰ-Ⅱ, Leipzig,1998-2000.

S.West, 'The transmission of the text', in: Heubeck/West/Hainsworth, 33sqq.

F.A.Wolf, *Prolegomena ad Homerum*, curavit R.Peppmüller, Halle 1884(3.Aufl.).

Wie ist die Odyssee gelesen? (1)

Tsugunobu Uchida

Während der Text der homerischen Epen infolge der willkührlichen Eingriffen der Rhapsoden oft in wilde Zustände geriet, erfand ein Rhapsode namens Theagenes die allegorische Interpretationsmethode, mit der die homerische Dichtung im Gehalt zu einigen gedanklichen Elementen reduziert wurde. In der alexandrinischen Zeit leisteten Aristarch und andere Philologen textkritische Arbeiten, in denen sich, neben guten wissenschaftlichen Einsichten, auch einige mehr oder weniger gewaltige Textänderungen bzw. Athetesen befinden, die gleicherweise eine Art Reduzierung des Gehaltes erzeugen.